記　事

消　息

〈国際学術シンポジウム〉「人文学からみた身体・生命・韓医学―『東醫寶鑑』と日韓両国の食治文化」への参加

吉田　和裕

順天堂大学大学院医史学研究室

2019年11月に科研費研究のため韓国へ渡航，慶熙大学校でのフィールド調査研究等を行うため学術交流を行いました．その際，恩師である金南一教授より同年12月18日に日本で国際学術シンポジウムを行うため，韓国韓医学研究院（Korea Institute of Oriental Medicine: KIOM）より招聘するので約束を交わし帰国しました．

後日，一橋大学大学院言語社会研究科韓国学研究センターと韓国韓医学研究院による国際学術シンポジウムが共同開催され，一橋大学東キャンパス第3研究館研究会議室にて研究報告を行いました．

今回のテーマは「人文学からみた身体・生命・韓医学―『東醫寶鑑』と日韓両国の食治文化」で，東アジアにおける韓国伝統医学の根幹をなす『東醫寶鑑』を医学的視点より，思想哲学の要素を強く感じました．

韓国韓医学研究院専任研究員の李敏鎬の司会進行で研究報告がされました．はじめに，一橋大学特任教授の李妍淑が開会の辞を述べられ，研究報告は5題で1回のコーヒーブレイクを入れて進められました．

国際シンポジウムに参加した方々と韓国で定番の指ハートポーズでの記念撮影．

Ⅰ.「『東醫寶鑑』と韓国韓医学の歴史について」慶熙大学校韓医科大学医史学教室 金南一教授 Ⅱ.「朝鮮総督府の医療・衛生政策―韓医学関連資料を中心に」一橋大学大学院言語社会研究科韓国学研究センター 李圭洙教授　Ⅲ.「韓国の食治伝統」韓国韓医学研究院学術主任 安相佑　Ⅳ.『鍼灸病証学』に引用された『東醫寶鑑』について「―経絡治療への影響第1報―」順天堂大学大学院医史学研究室 吉田和裕　Ⅴ.「歴史は飲食を変え，飲食は歴史を造った－日本の肉食と戦国武将の食術」慶熙大学校韓医科大学史学科講師の尹誠翃の順に報告されました.

講演者，参加された方は研究者が中心で，ほとんどが韓国人，数人の日本人と中国人で，実に国際色豊かな顔ぶれでした．発表及び質問も韓国語や中国語，そして日本語という流れで，日本において，これほど他言語での会話が展開され，ここは一体何処なのか，この空間だけがなぜか日本ではなく異国にいるような錯覚に陥り，印象深いものでした.

学会は，予定よりも時間をオーバーして終了し，発表者と参加者合同で記念撮影がありました（写真）.

その後の懇親会では，フィールドの異なる専門家の方々との新たな出会いもあり，大変有意義な時間を過ごすことができました．このような学会は，大規模ではありませんが，各分野の研究者との興味深い議論を交わすことで，新たな知見を得ることができました．今回，改めて学会の大切さに気付かされ，今後も国際学術シンポジウムなどで積極的に発表や交流の場を設けていきたいと強く感じることとなりました.

例会記録

日本医史学会3・4・6月例会

中止

例会抄録

江戸時代の医療とジェンダー～「女医師」を中心に

鈴木　則子

従来の研究史の中で，江戸時代の女性医師の活動は楠本イネなどごく少数の著名人をのぞいて，ほとんど注目されることがなかった．だが報告者は江戸時代の庶民医療の中で女性医師が一定の位置を占めていたと考えており，この問題についてこれまでも論文や口頭発表を通じて論じてきた（第119回日本医史学会総会・学術大会報告「江戸時代における大坂の女医」（2018年6月）など）．今回の報告では，「女医師」と呼ばれた女医の活動に焦点を絞り，その活動の実態と江戸時代の人々の認識について検討を加えた.

一般的に「女医師」＝こおろし婆というイメージが存在するが，史料を確認していくとこのイメージは東日本特有のものである．たとえば山東京山作・池田英泉画『北里花雪白無垢』（文政5年（1822））の挿絵では，女医者の診療所の門口に「女いしや　流水」「朔日丸」の文字が見える.

だが上方の史料では「女医師」という言葉は，